高密度傾斜地住宅街の成立に関する敷地計画的考察／尾道＜坂の街＞にみる都市のインテリア（その１）

○松尾兆郎，灰山彰好

A consideration on the glowing process of high density hillside town from a view of site planning ／ Studies of interior in the traditional town, Onomichi city (part 3)

○Yoshiroh MATSUO, Akiyoshi HAIYAMA

はじめに

尾道＜坂の街＞[1]の観光的魅力は、街を内側から観る感覚を覚えることにある。その主たる要因が旧き記憶を探るレトロ感覚にあることは言うまでもないが、ここでは、アート系新住民[2]による空き家再生の活動が、個人と街の距離を大きく縮めた効果を注目したい。この報告では、かかる計画学的視点を＜都市のインテリア＞と呼び､敷地計画からみた住宅地としての成立ちを考察する。

歴史的概要

商都尾道本来の市街地は、海岸線から千光寺山麓までの旧山陽道周辺の平坦地に限られ、山麓傾斜地は寺社のみが建つ聖地であった。明治近代以降の国鉄山陽線と国道２号線の敷設に際して、立ち退き代替地として斜面が当てられ（所有は今なお寺社であるという）、その後の尾道の活況が高密度住宅街を生んだ。

研究の方法

＜坂の街＞と通称される地区の 1/5000 地形概要図（**Fig.2**）、及び典型斜面地の地形鳥瞰図（**Fig.1**）を作成し､現地調査と文献資料から導かれる推量を加えつつ、表題について考察を加えるものとする。

考察

（Fig.2）

旧山陽道・本通り商店街は、間口巾に課税された町屋集落の末裔であり、＜軒切り＞にかかって拡幅され、またパラペット型に整形されているので、意外に広々として＜モダーン＞である。店舗裏の空地（菜園?）は借家・アパートで開発し尽くされており、出入りは戸境のすき間・廂間（ひあわい）に限られ、まさに秘境の趣を呈する。商店街から見上げる高台（標高 20m、勾配 0.17）は、往年は市民が散策を楽しむ近郊緑地であったと推察される。土堂１丁目には今もなお漁師町（地図上に詳記）が機能し、路地には魚を直売りするワゴンが並ぶ。

（Fig.1、位置を Fig.2 上に表記）

勾配が大きく変わる境界（**Fig.2** 断面線を参照）には、等高線に沿った自然道（本来は農道）が通っている。初期の移住は、この自然道の北側山林（勾配 0.54）を宅地造成した山手風宅地開発を嚆矢とするとのことであり[3]、

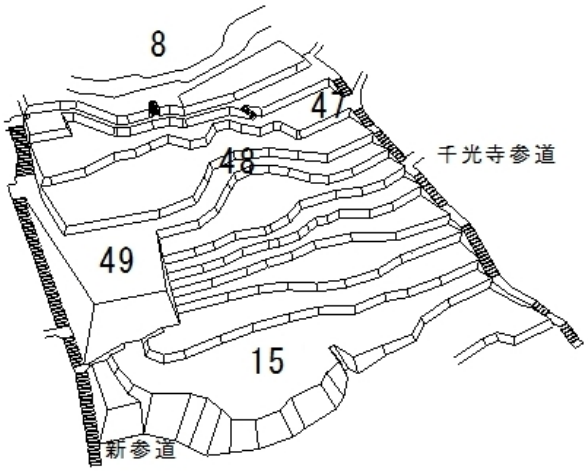

Fig.1 千光寺参道付近地形鳥瞰図
（施設番号については **Fig.2** を参照）

現在も瀟洒な和洋邸宅が数多く残っている。**8** 文学記念館はその再生施設である。都市型木造住宅といえば町屋、傾斜地住宅といえば地中海を臨む傾斜地住宅群[4]が思い浮かぶが、この狭義の＜坂の街＞には、高密度を可能にした建築的工夫は特に見当たらない。そこには唯一、斜面に適当な平坦地を見つけ（寺社から借り）、それぞれの思いを込めて建てた＜庭付き戸建住宅＞が見つかるのみである。複雑に見えるのは、元が人力で開拓された畑地であったからであり、寺院（**15**）や茶園（**48**）などの大規模建築物も例外ではない。但し、大正期に建てられた天野春吉氏別邸（**49**）の造成工事は別格かつ今日的である。新参道はその工事のために敷設されたという。

結語

地図作りを通して街の成立ちの類型を導いた。個別の関心に取り組むに際して、参考になれば幸いである。

注記

（1）旧山陽道周辺を含む歴史地区を呼ぶものとする。

（2）空き家再生を通してアーティストになった方を含む。

（3）傾斜地利用の歴史地理学的視点「尾道市の機能と構造」立命館大学人文学会、昭和 53 年刊所収

（4）同書序文には、地中海の傾斜地住宅とは異なると記されているが、その根拠は述べられていない。

（穴吹デザイン専門学校）
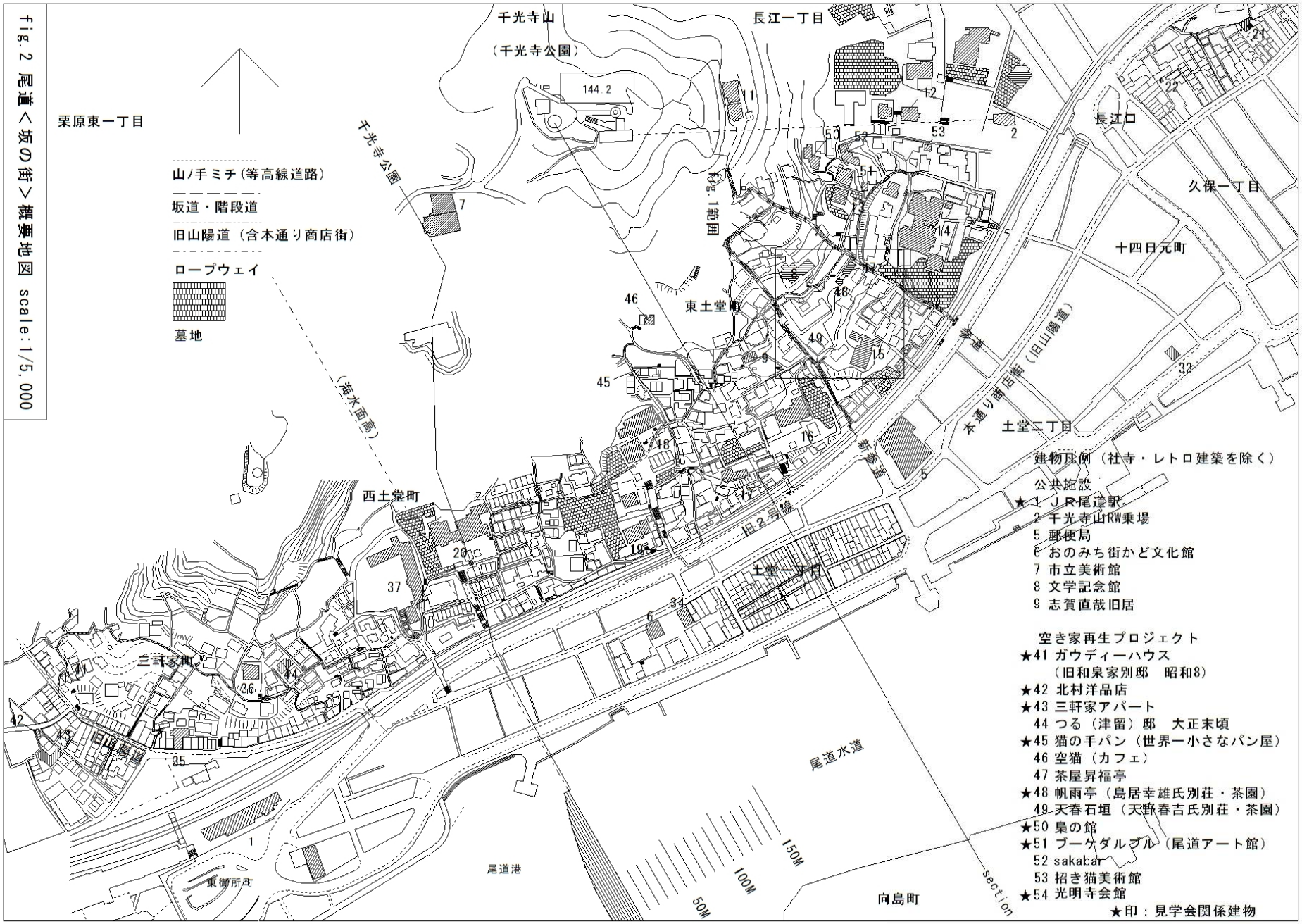
fig.2 尾道＜坂の街＞概要地図 scale:1/5,000